

アートと対話でひらく 「いてくれてうれしい」今治の未来

令和7年度 市民が共におこすまちづくり事業
テーマ型協働推進事業 「共生社会推進の取り組み」

あなたがいる喜び



プロジェクトの実績まとめ

延べ255名の市民が参加！

参加者の声

めっちゃ楽しかった。またやってほしい！
(市内小学生)

子どもがどうしてもと言うので、2日間通って
しまいました。常設してほしいですね。
(市内在住小学生のお母様)

これは車いすの人でも楽しめます！
老人ホームにほしい。(市内在住30代介護職)

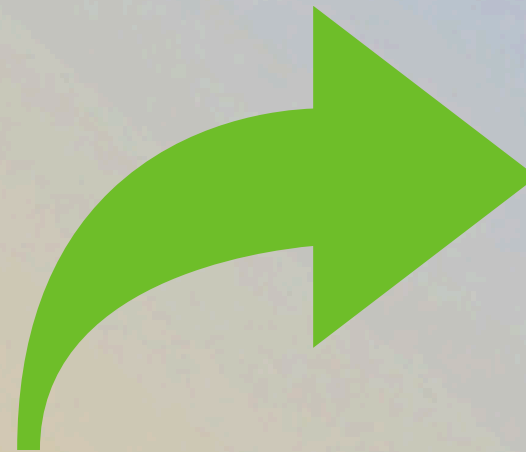
もっとみんなに知ってほしいですね。
(市内在住50代男性)



「共に生きる」を、アートとまちで考える。

従来のアート観

絵画・造形・音楽・演劇



再定義：人の営みそのもの

食べる
眠る
笑う 怒る
対話 葛藤
共同生活

アートとは、特別な人の表現ではなく、違いを結び、想いをほどこき、世界を少しやわらかくしてくれる力
何ができるかではなく、ただそこにいることを喜び合える関係性をつくります

1. 事業の目的と目指す効果

目的

アートを介して
障がいの有無や世代、国籍などを越えた出会いを、
“共に生きる”を実感できる機会をとおして、
今治のまちにひらきます

効果

1. 多様な人々が交わる場の創出
2. 「ケア」の社会共有
3. 「失敗させないように守る」からの脱却

2. 実施内容（全体像）

2026年の「イマバリ・パラビエンナーレ」本開催に向けたキックオフとして
3つのアプローチで地域社会との協働を実践しました

①体験

11/1-2



KOSUGE1-16

巨大サッカーボードゲーム
でつながる！

みなと交流センターは一ばりー

②対話

11/1



シンポジウム

体験活動を懸け橋に
～協働する地域社会を考える

みなと交流センターは一ばりー

③学び

12/17 1/14
1/21 2/4



地域文化講座

アートから地域を考える
4つのレッスン

今治ホホホ座

実施内容①

プレ・イマバリ・パラビエンナーレ KOSUGE1-16

巨大サッカーボードゲームで つながる！

美術家KOSUGE1-16 土谷享による
巨大参加型アートがはーばりーに出現
サッカーのルールを知らなくても、
運動が苦手でも、年齢も障がいも国籍も関係なく、
一緒に遊べば自然と笑顔があふれました。

両サイドの12本のスティックをみんなで押したり、引いたり。
うまくいかなくても、みんな声を張り上げ、助けあい！



実施内容②

シンポジウム

「体験を懸け橋に ～協働する地域社会を考える」

まちづくり、社会福祉、教育、文化政策など
多分野の有識者でディスカッション。

巨大サッカーボードゲームをそのままステージにした
基調セッションや、巨大サッカーボードゲームを
遊ぶ声の傍らで行ったミニセッション。

来場された皆さんが議論に参加できるフラットな
形式で「協働する地域社会」を議論しました。

共生・共助

多様性

ケアをみんなで共有すること



シンポジウムから見えた「共生社会」へのヒント

岡田 武史（今治・夢スポーツ）

「スポーツの世界には勝ち負けがあります。でも、アートはどう捉えるか・表現するかはその人次第。だから、人を分断しない。これからの時代、人と人をつなぐのはアートのような、目に見えない感情の動きだと思います。」

森 真理子（厚生労働省）

「アートにはより広い視野や展望を持つという意味で『“大風呂敷”を広げる』ような役割があると思います。上も下も横の垣根もなく、立場を超えて一つの場を共有し、人々を楽しませる力があります。」

小松田 儀貞（秋田県立大学）

「ケアとは『関心を持つ』『気にする』ということなんだけど、すごく限定的に捉えられてきた。『ケアをみんなで共有する』という視点が必要だと思います。」

土谷 享（美術家/KOSUGE1-16）

「アートは口実というか、これをきっかけに本来であれば出会わなかったような人たちと結びついて一緒に取り組めるということが価値。アート自体ではなく、そこで起きることがメインディッシュです。」

実施内容③

地域文化講座

「アートから地域を考える 4つのレッスン」

全4回のワークショップ。「アート=人の営み」と捉え、アーティストと共に多様な他者との共生を探求。アート実践の対話、合作俳句や演劇など表現活動をとおして自分と他者の感じ方の違いに気づき、多様な価値観を尊重して、もちつもたれつで共に生きる社会のあり方を体験的に学びました。

レッスン①



アートとは何か？
ケアとは何か？

レッスン②



もちつもたれつ、
アートができること

レッスン③



人との出会い方としての、
ことばあそび

レッスン④



わたしではない誰か
について考えてみよう

モノやカタチに現れないアートの実践から、自分ではない他者との違いを認め合う「共生社会」の形を学ぶ

3. 実施体制・協力先

多様な関係者の皆様との協働により、地域に根差し、共生社会の実現に向け、事業を推進しました

協力先	協力内容	備考
今治市	後援および広報協力	障がい福祉課/市民参画課/文化振興課
今治市社会福祉協議会	後援および広報協力	
愛媛県障がい者アートサポートセンター	後援および広報協力	
岡田 武史 氏	シンポジウムへのご登壇	
愛媛県	後援および広報協力	障がい福祉課
今治市教育委員会	後援および広報協力	
FMラヂオバリバリ	番組内広報およびゲスト招聘	すっぴん小町（10/22、12/10出演）
今治市商店街協同組合	広報協力（チラシ掲出）	

4. 成果・実績（参加規模と広がり）

巨大サッカーボードゲーム体験

延べ約**150名**（2日間）

シンポジウム参加者 地域文化講座参加者

約**50名**

延べ**55名**（4日程）

多種多様な参加者

地域の子どもたち、障がい当事者やそのご家族、
港周辺を散策中の外国人観光客など属性を越えた
参加交流を実現。

メディアへの掲載

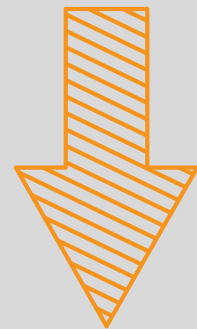
今治CATV、愛媛新聞地方面、毎日新聞地方面
など地元メディアのほか、TBSテレビ、福祉新聞
で全国へも発信



アートをとおした「3つの変化」

1. 地域文化の変化

「特別な人」として
社会から遠ざける



違いを面白がる
共生社会へ

2. 支援者の変化

失敗しないように
先回りして守る



成長を信じて待つ
スタンスへ

3. 当事者の変化

「してもらう」
受け身の姿勢



自己実現の主体へ

これが、私たちの目指す共生社会への道筋です。

次なる舞台へ。2026年「イマバリ・パラビエンナーレ」本開催

誰もが自分の人生の当事者になれる地域へ
「あなたがいる喜び」を感じられる今治へ

令和7年度 市民が共におこすまちづくり事業で行わせてもらった
今回のプレイベントは、その最初の一歩です
2026年の本開催に向け、今治というまちのあちこちが舞台となり
障がいの有無や年齢、国籍など違う人たちが一緒になって
作品と社会を育てていきます

ちがうことが交わり、まだ見ぬ素敵な未来が芽吹き始めるこの時間
ぜひ皆さん一緒に今治をつくっていきましょう

あなたがいる喜び

